



# 萬福寺に残る“馬込文士村”の面影

## 室生犀星の句碑誕生のいきさつ

「ふるさとは遠きにありて思うもの……」とうたった詩人で小説家の室生犀星の句碑が境内に建てられ、除幕式が行われたのは、平成7年（1995）この年の1月に阪神・淡路大震災が発生）の12月2日でした。今から24年前のことです。同年11月29日付の読売新聞が、句碑誕生の経緯を次のように伝えています。

——大正時代、多くの詩人や作家たちは1923年（大正12年）の関東大震災を期に、当時は農村だった大田区馬込付近に移り始めた。

詩人の北原白秋、三好達治、萩原朔太郎、小説家の山本有三、川端康成、石坂洋次郎、山本周五郎……。

犀星も32年（昭和7年）に現在の南馬込一丁目に住居を構えた。

犀星の長女で作家の室生朝子さん（大田区山王二丁目）は「父はここで、時計のように規則的な生活をしていました。朝6時に起きて、午前中は仕事。夜8時にはせかされるように床についていました」と思い出す。

大田区はこの地区を「馬込文士村」として散策マップをつくり、「村」にちなんだ菓子も販売されている。

写真（上）は当山から東へ歩いて3分にある馬込自然林区民緑地。昔の馬込を偲ばせる風景が残る。

ところが戦災があったりして、往時を伝える建物はなく、住居跡を示す表示が各所にあるだけだ。

朝子さんは「来ていただいたいても、何も文学に関連するものがないので」と、地元で暮らしているだけに寂然としないものを感じていた。

朝子さんの働きかけもあり、旧犀星宅に隣接する萬福寺（安本利正住職）が「寺は文士村の中心にある。往時をしのぶものを」と2つの句碑を作った。朝子さんが馬込にちなむ句を選び、周りには犀星宅の庭にあった30個余りの庭石をあしらった。……文学作品が東京で碑になったのは初めてという。

犀星宅があったのは当山の西側、お墓に面して現在、赤い外壁のマンションが建つ所です。句碑は、本堂の西側、裏参道へ抜ける左角と、鐘楼門の脇にあります。ご来山の際には、ぜひご覧ください（敬称略）。

室生犀星【むろう さいせい】  
詩人・小説家。明治22年（1889）金沢生まれ、昭和37年（1962）没。主な作品には『愛の詩集』『抒情小曲集』『幼年時代』『あにいもうと』『杏っ子』などがある。昭和3年（1928）大森谷中（現・山王四丁目）に越してくる。同7年（1932）馬込町東三丁目（現・南馬込一丁目）に新築移転。以後、没するまで在住。馬込小学校、馬込第三小学校、萩中小学校の校歌などを作詞した（参考『馬込文士村ガイドブック』大田区立郷土博物館発行）。



「陽炎」  
葱の皮  
はがれしままに  
かぎろひぬ



「笹鳴」  
笹鳴や  
馬込は垣も  
まだらにて

「かぎろ（う）」は「かげろう（陽炎）」に同じ。春のうらかな日に、ちらちらと立ちのぼる気のこと（春の季語）。馬込の葱畑を読んだもの。

「笹鳴（ささなき）」とは、冬にウグイスの鳴き声はまだ調わず舌鼓を打つように鳴くこと。その鳴き声（冬の季語）。垣根もまだらな新興住宅街の馬込の風景と掛け合わせて読んだ。